

新春 座談会

—新型コロナウイルス感染症対策の現場から— 3者連携で命を守る

安心はしても油断はしないで

令和4年は、健やかで穏やかな日々を取り戻す年にしたい。2年にわたって、新型コロナウイルス感染症への対応に心血を注いでこられた目黒区医師会会長の渡邊英章さん、目黒区薬剤師会会長の寺田友英さん。この2年間の取り組みや新しい1年の見通しなどについて、青木区長と語り合っていました。



—新型コロナウイルス感染症の第5波が、昨年10～11月に減少に転じたといわれています。その要因と現在の状況をどのように捉えていますか。

渡邊 感染者の減少は現場でも実感しています。その要因はさまざまあって、これだと断定はできていません。ただ、重症者が減ってきているのは、ワクチンの効果だろうと思っています。

寺田 ウイルスが怖いのは感染すると、複数の感染者を生んでしまうことです。ワクチン接種によってうつす確率が減ったことが、理由の一つではないかと思っています。また、換気、マスク、手洗い・うがいなどの励行が日常になったことも、感染者減少の要因の一つでしょう。新規感染者は少なくなってきましたが、まだ油断はできないと感じています。ただし、以前と違うのは、新しくワクチンという武器を、私たちが手に入れたということです。

青木 具体的な数字はこれから検証されると思いますが、ワクチン効果は間違いないでしょう。高齢者の重症化率をみると、圧倒的に接種されたかたが低いという結果が出ています。これは目黒区だけでなく、どの自治体でも同じです。

—ワクチン接種の取り組みは、自治体ごとに異なりました。目黒区では接種の担い手に、医師会や薬剤師会の協力をいただきました。

渡邊 感染者が増え続ける中、何とかしなければならぬという危機感がありました。医師会会員に接種活動への協力を依頼したものの、当初は人が集まるか心配でした。自らの診療時間を犠牲にして接種の担い手になるわけですから。ところが、ふたを開けると多数の応募があり、あっという間に枠が埋まったのです。会員それぞれが、同じように危機意識を持って



いたのだと認識を新たにしました。

寺田 薬剤師会や薬剤師は、医療の担い手の一部とはいわれていましたが、コロナに対しては何かできるのかと、当初はもどかしかしく思っていました。待ち望んだワクチン接種の話が出た昨年3月、すぐに協力できると、区に連絡しました。実際、薬剤師会も医師会同様に、多くの会員から手が挙がりました。

青木 両会長から協力の申し出をいただき、本当に心強く思いました。最初のワクチンは、23区では高齢者の多い順番で供給されたため、目黒区は最後のグループになりました。しかしそこから、両会の協力で、接種会場などの準備が進み、早期に高い接種率を実現できました。心から感謝申し上げます。

—接種のスタート段階での課題や、懸念材料はありましたか。

青木 ワクチンの供給に関して、スタートか

らずっと国や都の情報が二転三転しました。そのたびに両会長に新しいお願いをすることとなり、ご迷惑をお掛けしました。

渡邊 いえ、変更のたびに区から素早く情報をいただき、こちらの要望も聞いてくださってありがたかったです。普段から区と緊密に連携をとってきた成果だと実感しました。

貴重なワクチンの無駄を少なくするための運用面、接種部位も整形外科の先生にアドバイスを受けるなど、できるだけの準備をしました。

もう一点は副反応です。大変なことが起こっても、大丈夫な体制づくりに力を入れました。

寺田 困ったことは、みんながぎりぎりの状況で準備を進めざるを得なかったことです。しかも、現場に配給される注射器が徐々に別のものになっていきました。ワクチンを吸い上げる感覚が変わるので、その都度対応を迫られました。というのも、メーカーの示した取り扱い方法に従って、正しく注射器に薬剤を充てんするためには練習をする必要があり、またその練習用の注射器集めにも苦労したからです。



厳しい状況下でしたが、区や医師会、薬剤師会、そして、区民の皆さんが前向きに動いたことで、今があると思っています。

青木 両会だけでなく歯科医師会、目黒消防署、訪問看護のかた約3,500人への先行接種から対応いただいて、区民への接種体制をつくることができました。接種対象は、最終的に12歳以上で25万3,400人。これほどの規模の予防接種は、経験がありません。区の組織も縦割りを超えて、職員全員が協力していくことを掲げ、早い決断・行動・対応を職員に強く指示しました。

結果、この八雲体育館では一番多いときで、1日約1,100人の接種を実施できました。65歳以上は95%に迫る接種率で、23区内でもベスト3の高さです。全体(12歳以上)でも83%を超えています。希望者の接種(2回目)は現在、おおむね終わっています。

—医療体制は目黒区も例外なく、ひっ迫しました。医療崩壊ともいわれた昨夏、現場での体感はいかがでしたか。

青木 7、8月は区内で2,000人近い方々が自宅療養する事態になりました。その方々に対する医療支援が課題となりました。

渡邊 私たちができることは、自宅療養者のケアです。24時間の電話対応や、患者宅への診療は、先生がたに、防護服を着て決死の覚悟で行ってもらいました。保健所がオーバーワークになっていることをみんな知っていたので、訪問看護ステーションと連携して、保健所の負荷を減らそうと努めました。

寺田 薬剤師会は、先生がたが診察された後、発熱外来への薬をいつ、どのように渡すのが課題でした。検査をして、陽性か陰性かが分かるのに、タイムラグがあるからです。渡す際に防護服を着るのか、



夜間はどうするのか、悩みながらも対応しました。

青木 都からの食料品の支援が滞ったため、区で独自にレトルト食品などを用意しました。定期的に電話連絡をして、つながらなくなった場合は、職員が直接家に伺い、感染対策をしっかりしたうえで、安否の確認などをしました。両会、職員、区民の皆さんと協力し合って、第5波へ対応してきたと思っています。

—新型コロナウイルス感染症以外に、区民の健康について懸念されることがあれば、お聞かせください。

渡邊 コロナ禍でコロナ以外の病気、例えばがん検診を受けない、体調が悪いのに受診しないケースが増えました。今は通常の医療体制に戻ってきています。受診控えは非常に危険です。早期発見のために、必ず検診を受けてほしいですね。

寺田 薬剤師会でも、病院・医院を受診するかたが少なくなったと感じていました。

今は少しずつ戻ってきています。区民の皆さんは、健康に関して気になることがあれば、遠慮せずに声を掛けてください。

—最後に、新しい1年の見通しや方針について伺います。

渡邊 発熱者に対して、抗原検査とインフルエンザ検査を行います。該当するかは休日診療所で受診していただければ、診断することができる体制を整えています。ワクチンの3回目の接種効果と安全性は証明されているので、ぜひ受けていただきたいと思っています。また未接種のかたも、これからでも遅くはありませんので、予約してください。

オミクロン株が出てきたこともあり、コロナについて油断するにはまだ早いです。基本的な感染症対策を続けていただきたいと思います。

寺田 明るい希望は、世界規模で開発されている内服薬です。日本では、有効性を承認するまでのハードルが高いのですが、ワクチンのときのように緊急措置として前倒しになる可能性もゼロではありません。

青木 新しい1年が始まります。28万の区民の皆さんが乗船される「目黒丸」の船長として、コロナの荒波を乗り越えて、区民の生命、生活を守るため、ベストを尽くしてまいります。

まずは、医師会、薬剤師会のご協力をいただいて、3度目のワクチン接種を進め、オミクロン株にも備えていきます。

また、3年11月からコールセンターの電話をフリーダイヤルにし、回線の増強も図っています。これからも今まで以上に接種しやすい環境づくりに努めていきます。

新しい1年も、皆さまの一段のご協力をお願い申し上げます。本年もどうぞよろしく願いいたします。